

熊野の
木林から

熊野の川には今でも！なを越す巨大魚が潜んでいる。写真は熊野の川での調査中に捕獲したオオウナギ。

前回(其の二十〇)にて熊野の滝や沼に大蛇の怪異が多いことを書いた。その理由として、災害による劇的な地形変化を大蛇の這はい回った跡に例えた可能性を指摘した。また、多くの大蛇がそこに潜む「主」であることを書いた。滝壺や川の淵、沼に「主」が棲(す)むという伝承は、日本全国に伝わっている。中でも、沼や湖の「主」と恋に落ち、最後には水に身を投じるとい話は非常に多い。あるいは、「主」の怒りを

怪野の熊

其の(主)
「主(ぬし)」



和歌山大学
システム工学部
環境システム学教授
中島敦司教授

は、「主」の怒りを買ってしまったり水に引き込まれてしまおうという話もある。「主」は大蛇だけでなく、巨大な魚、亀などが変化したという話も残る。

紀伊半島における「主」の話は、蛇以外では、以前にも紹介した龍神村小又川にあるオエガウラ淵のコサメ(アマゴ)小女郎や小次郎、白浜町平の濁り淵と田辺市長野の弁天淵を行き来したという緋鯉(ひごい)の主、野迫川村檜股のかま淵の鯉の主、美浜町日の岬にある上人穴の竜魚(サメ)などの伝承がある。主の正体が蛇だとされた場合でも、例えば大ウナギ、大ナマズの姿を想像させる話もある。

話は変わるが、恐竜の生き残りだとされる未確認生物(UMA)が世界中の水辺で目撃されている。イギリスのネッシー、カナダのオゴボゴ、アメリカのマニボゴ、チャンプ、バブアニューギニアのミゴーなどは特に有名だ。日本でも、北海道屈斜路湖のクッシー、鹿児島池田湖のイッシーなどは観光資源



私達の身近な川は、かなりの場所で直線化、コンクリート化が進んでいる。こうなってしまうと「主」が潜むことはできない。動物が落ちてしまったら助からない。写真にはニホンアナグマが遠方にくれている様子が写っている。

になっている。山形県の大鳥池に生息しているといわれるタキタロウは、実在のサケ科の大型魚としての搜索が続けられている。

紀伊半島は豊かな海に囲まれ、そこに流れ込む川は多雨地帯であることもあって清流の状態を維持してきている。その結果、例えば全長1キロを超えるアカメヤ、オオウナギが生息していたりする。オオウナギはウナギとは別種だ。昔は、今よりもたくさんいたとみられるが、さらに大型にまで成長した個体も生息していたことだろう。それらが人前に現れた際に「主」として人々を驚かせたことは想像に難くない。ところが、近年は河川改修が進み、川には淵が激減、沼はコンクリート護岸となった。滝壺には観光客がたくさん訪れる。そんな場所に主は潜むことはできない。

中島敦司(なかしま あつし)教授プロフィール

昭和38年、岐阜県生まれ。三重大学大学院生物資源研究科博士後期課程を修了。平成8年から和歌山大学システム工学部講師、12年から助教。19年から教授。51歳。専門は森林生態、自然再生、砂漠緑化、海岸林再生、地域資源、地球温暖化、自然エネルギー、民俗(妖怪伝承)。NPO活動にも力を入れる。熊野方面には年間30〜50日は訪問し、研究する。

